

石川 一著『慈円和歌論考』

辻 勝美

慈円の研究の第一人者として知られる石川一氏により、待望の著が上梓されたことをまず心よりお慶び申し上げたい。

本書の意図は、その書名に明確に示されているが、また著者自身の「はしがき」にも記されているように、慈円に関する従来の研究が、歴史的人物像の解明に主題をおくものが多いのに対して、慈円の和歌及びそれに付随する著述の解明を目指したところにある。したがって、本書の意義も、慈円の生涯にわたる詠歌活動の展開、様相を整理して、その歌人像、和歌表現の特質を究明した点にあるといえよう。とくに慈円の和歌を論ずる際に基本となる詠作資料について、従来の研究ではその本文の調査や批判整理が不十分であり、厳密さを欠いていたのであるが、著者の精力的な伝本調査、本文研究によりそれらの欠点が埋められ、基礎的な問題が解明、整理されたのである。また、慈円についてはもとより同時代の主要歌人たちやその歌壇活動の研究を大きく進展させた功績も多大であろう。

さて、本書は「Ⅰ家集篇」と「Ⅱ詠歌篇」との二部より成るが、評者なりにその概略を紹介してみたい。まず「Ⅰ家集篇」は、家集の形態で伝存する作品を対象として、慈円の詠作資料の総合的

な整理を試みたもので、とくに著者がはやくから手懸けられた「拾玉集」の伝本研究を中心とする諸論考を収めている。慈円の家集「拾玉集」は、収録歌数が約六千首という大部の歌集であり、その伝本の整理は容易ではないことが知られる。そうした困難な課題に立ち向かわれた著者の情熱と並々ならぬ労苦にまず敬意を表すべきであろう。すなわち、同篇の第一章「拾玉集の研究」では、三十余りの「拾玉集」の伝本を調査、検討し、新たに六系統に分類されている。「拾玉集」に収められる百首歌の形態により、Ⅰ嘉暦類聚本系統・Ⅱ貞和類聚本系統の二分類に、さらに伝本の形態により、Ⅲ五卷本系統・Ⅳ七卷本系統・Ⅴ改編五卷本系統・Ⅵ「異本拾遺」系統本の四分類に細分できるとする見解である。従来の研究史を踏まえたうえで、最善本とみなされるⅢ五卷本系統の青蓮院本を諸本の成立論の中心に据え、それぞれ尊円親王による嘉暦・貞和の二度の慈円歌の類聚作業を経た伝本の実態についての詳細な調査、検討がなされている。

青蓮院本については、同本全体に付された「正本」による校異・注記類を検討し、七卷本系統本の底本「曼殊院本」は「正本」と同系統であるとの結論が導き出されているのであるが、とりわけ、青蓮院本の奥書の意味と本文中の校異・注記との関係が明確になったことにより、「拾玉集」の伝本研究が飛躍的に進展したといえ、注目すべき研究成果として定評のある論でもある。

なお、個々の伝本の性格や位置付けについては、部分的には検討の余地を残す問題もあるようである（嘉暦類聚本の位置付けなどに関しては若干の異見も出ている。山本一氏「慈円の和歌と思想」（一九九九年一

月、和泉書院）参照）、今後の研究の進展が期待されるが、基本的な系統分類についてはまず動かないといえよう。

さらに、第二章「拾玉集」以外の家集」では、書陵部蔵「無名和歌集」と龍谷大学蔵「慈鎮和尚家集」をとりあげ、それぞれの成立、本文の性格について考察している。前者は、文治・建久期以前の詠作を部類した自撰家集とみられるが、「夫木和歌抄」所収の慈円歌に付された詞書中の「御集（家集）」とは関連がないとされている。周知のように「夫木和歌抄」中には、現在では散逸した多くの諸家集が資料として使用されているが、近時の研究においてもそれらの個々の家集の資料的性格や分析が各歌人ごとに試みられており、そうした研究の動向からも注目されてよい指摘であろう。

また、本書にも触れられているように近年の古筆切の研究成果として、田中登氏によって伝世尊経朝筆慈円歌集切の紹介がなされ、「拾玉集以前の慈円家集」の存在が指摘されているが（その後、鹿野しのぶ氏によって同種の断簡二葉七首の紹介がなされた。『語文』第九三輯（一九九五・一二）所収論文参照）、それらの自撰家集に関する資料も視野に入れた、慈円の和歌作品の全貌が捉えられる時期に到達しているといえよう。

「Ⅱ詠歌篇」は、以上の伝本研究を踏まえうえに立って、慈円の和歌作品そのものについての考察を試みた諸論考を収めたものであり、五百頁以上にも及ぶ。同篇の第一章から第四章までは、それぞれ初学期・実験期・習熟期・自省期の四期に分けて慈円の和歌活動と作品について詳細な考察と読解が試みられる。著者自

身も述べているように「精神的考察」に力点がおかれ、慈円の歌人像が和歌表現に即して具体的に探求されている。

「第一章 初学期」の百首群の検討からは、様々な位相の孤独と、その孤独を超越してゆく過程を辿ることができるとし、さらに西行歌の受容の具体的な実態について説明している。いうまでもなく中世文学において西行法師の占める位置は甚大であり、殊に和歌史における西行の問題を無視することはできない。新古今時代においても、西行からの影響のありようは歌人によって様々であると考えられるが、周知の「大僧正は、おはやう西行がふりなり」（後鳥羽院御口伝）という慈円評を引くまでもなく、とりわけ西行と慈円との関係は注目される点でもある。両者の詠歌の類似歌句の指摘のみならず、宗教生活における「心」のあり方の近接という様相まで論じられており、それらの問題の検討から西行享受における同時代の歌人たちとの共通点や差異も明らかにされてくることになるう。

「第二章 実験期」では、いわゆる速詠百首群や良経歌壇における百首群が考察される。遊戯の性格の強いとされる速詠作品について、住吉百首の場合にはその詠歌内容の分析から宗教活動の反映が認められ、一句百首などの速詠歌群とは異質の要素をもつことが指摘されている。また、六百番歌合などの良経歌壇での詠作活動に関しては、良経との交流や新風和歌の形成を担った役割についても言及している点なども注目されよう。

「第三章 習熟期」は、後鳥羽院歌壇における主要な百首をとりあげている。伝統歌の世界に立脚した上で独自性を発揮してい

る作品傾向（定家の本歌取りの方法論とも一線を画するとされる）などに、この時期の慈円の和歌の到達点や和歌観の問題をみている。

「第四章 自省期」は、建暦・建保期から承久期にかけて集中する法衆百首群の考察で、他の歌人にみられない慈円歌の特質が解明される。遊戲的詠歌態度として指摘される表現の背後に、法衆の意図と表現との関わりを読み解いたもので、個々の百首の成立時期や詠作意図が丹念に検討、考察されている。政治的情況と密接にかかわる時期でもあり、慈円の思想の問題を考える点でも注目されるが、『拾玉集』の本文系統による差異の問題を踏まえて検討されており、伝本研究の成果がもつともよく活かされた、著者ならではの立論、分析であり、説得力のあるものとなっている。「第十節 法衆百首総論」においては、百首群全体の傾向や共通する問題についての考察がなされ、また「終章」においては、慈円にとっていったい和歌はどのような存在であったかという問題についての確認、整理がなされており、読者に対する実に行き届いた配慮もみられる。さらにまた「付章」には、『華頂要略門主伝』（慈円の項 人名索引と増訂版の「慈円年譜」）を収めるが、慈円の七十一年にわたる生涯をたどることができる労作で、甚だ有益、至便である。

以上のように、本書は既発表の論文の集成ではなく、本書所収のものを定稿とすべく十分な配慮をもって補足、整備されていることが知られ、いたるところに著者の誠実な学問的態度を垣間見ることができる。なお、著者の慈円和歌に関する研究業績としては、本書に未収録のものにも「校本『慈鎮和尚自歌合』」、「七卷本（架蔵本）拾玉集翻刻」、その他の貴重な資料翻刻があるほか、

ごく最近においても、青蓮院本の校異・注記を忠実に翻刻した『拾玉集本文整定稿』（一九九・二、勉誠出版）が公刊されており、文献学的な基礎がより一層強固なものとされている。

慈円は、中世の思想・信仰との関わりで西行以上に注目される存在でもある。西行のみならず、慈円とその和歌が同時代歌人に与えた影響、さらに、慈円和歌にみられるような表現の行方はどのようになったのかなど、慈円をめぐる問題は興味がつきない。

慈円の和歌の特質を考えることは、中世的な和歌の性格を解明することにもつながるであろう。ともあれ本書によって、新古今集において西行について第二位の入集歌数をもつ慈円の歌人像が鮮明になった。今後、慈円はもとより中世の表現と思想の問題を研究しようとする者にとって、本書より蒙る恩恵ははかり知れないものがあるといえよう。

著者が慈円を研究の中心に据えたのは修士論文からということである（本書「あとがき」による）。和歌史研究会編による『私家集大成』七卷八冊の刊行が終了したのが一九七六年であり、著者が慈円研究に取り組まれた時期と重なるようである。その後の私家集研究や歌人・歌壇研究の進展とともに著者の慈円家集の本文研究も開始され、爾来二十二年間にわたり慈円和歌の解明に情熱を注ぎ、たゆまぬ努力を続けられてきたことになる。その間に積み重ねられた研究成果の重みを感じるとともに、とくに研究の質量ともに著者の足元にも及ばない評者にとっては、甚だ刺激的な大著であったことを付言し、紹介としてもまことに舌足らずな稿を終えさせていただく。